
P-M A X

暗影恐夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P - M A X

【Nコード】

N 0 8 6 8 D

【作者名】

暗影恐夜

【あらすじ】

超能力の研究を行ってきたセフィロト機関。そのセフィロト機関により体の隅々までを弄られ、陵辱された主人公、十六夜祐は自らをリタリエイター（復讐者）と名乗り、セフィロト機関への復讐を誓う。

序

夕日に染まる教室。そこにいるのは二人の少年だった。

片や黒い髪をざんばらに伸ばした少年、もう片方は眼鏡をかけた知性的な雰囲気を漂わせる少年。二人ともここ、高麗学園2年B組の生徒である。

「去年の 今日だった」

黒い髪を伸ばした少年が小さく呟いた。その目は窓の外に向けられており、そこに浮かぶ感情を知るのは難しい。

「姉さんが消えた。警察はろくに調査もせずに行方不明とだけ決め付けて、この件はもう忘れられた」

抑揚無く、淡々と続けていく。

「今年も起きるかもしれない、と？」

眼鏡の少年が言葉を遮る。

「ロマンチストだな、どこの七不思議かねそれは」

「この学園が何か隠しているのは事実だ、現に姉さんの時だって」

「

「君も都合よく巻き込まれるとは限らないだろう？」

「ッ！」

ギリ、と歯軋りの音が聞こえる。

「ま、それしかないのならそれに懸けるというものだがね」

「お前は何でいるんだよ、ここにいる理由がないだろ？」

「お前を一人にすると何をしでかすかわからなくてね、別に不味いことはないだろう？」

「勝手にしろよ」

ざんばらに伸ばした髪をくしゃっと掻き、少年が教室から出る。

（つたく、保護者ぶりやがって）

心中で愚痴をこぼしていると、耳に何やら声が入ってくる。

『……対象者は……去年度よりも質の高い素質……超PSI発生シ

ステム……」

「どうやら成人男性の声のようである。人数は二人程度というところか、学校の教室か何かだろうか。」

声は先ほどまでいた教室の隣の教室から聞こえてくるようである。

「おい、綾媛」

「分かっている、隣の部屋の声だろうか？」

「ッ……！」

声は少年の背後からした。何時の間にか眼鏡の少年　綾媛が背後に立っていたのである。

「気配を消すような真似は止めるよ……」

「俺はそんなつもりはないのだがな」

「余計性質が悪いな」

少年は吐き捨てるように言うと、扉の隙間から隣の教室の様子をのぞいた。中にいるのは白衣のようなものを着た大人の男が三人、その肩には従の円が規則的に並べられた紋様　セフィロトの樹が描かれたワッペンがつけられている。

「セフィロト機関か？」

セフィロト機関。その強さの強弱に関わらず人間が潜在的に持つ超能力を利用した商品を製造、販売している会社である。その規模は大きく世界中に支社を持っており、もちろん日本にも幾つか支社がある。

「そんな大きな会社が何で……」

綾媛が呟く。刹那。

「誰だ？」

男の一人がこちらを向き、問い掛けてくる。少年たちが逃げ出すとしたときにはもう遅く、扉が開けられる。

「ん、君達は　2年B組の十六夜祐君と綾媛幹也君だね。ふむ、少し話がある、時間をいただけないかね？」

思えばこれがすべての始まりだったのだ。

そう、あの地獄のような日々の……

序（後書き）

ん、何々、ギアライザーじゃないのかって？そのとおりです、違います。

ギアライザーの方については保留中です、多分完結はさせますんでまあ、気長に待っていてください。多分ですが。

今回はギアライザーと違ってかなりのシリアスになる予定です。それはもうマジで。

なので暗い話が嫌な方は読まないほうがいいと思います。きっと鬱になるんで。

まあ、このプロローグを読んで少しでも惹かれたら読んでくれると幸いです。

ではこれにてノシ

act 1：復讐宣言

東京。いつの時代になってもここは日本の中心で多くの技術が集
中し、活気があふれている。

高層ビルに設置された大型モニターの中では女性アナウンサーが
今日のニュースを述べていた。田舎で起きた殺人事件のことを伝え
たあと、画面にテロップが入り、別の話題に切り替わる。

『次は現在日本でテロ活動を行っている武装勢力クリフォートについ
て、セフィロト機関が開いた記者会見の映像です』

すっかり悪役だな。

男は心中でつぶやいた。黒いサングラスで目元を隠し、黒いロン
グコートを身にまとう。ざんばらに伸ばしていた髪はばっさり切っ
た。未練や何もかもと共に。

記者会見には自衛隊が武装勢力に対し攻撃を行うこと、それに対
しセフィロト機関が物資援助を行うことなどが発表されていた。だ
が、きつとそんなものは隠れ蓑に過ぎないだろう。何から何まです
べてをセフィロトが行うはずだ。それを正当化するためにそんなこ
とをほざいているのだろう。

記者会見の映像が終わり、別のニュースになると男は興味を失っ
たように再び歩き出した。

轟っ！

大気を震わせ、一体の巨大な鋼がビルの隙間を舞った。大きさは
8メートル程度、全身を薄いグレーに塗装されたその機動兵器はビ
ルの合間で滞空するとくると背後に向き直った。ヴン、と双眸が

デュアルセンサー・アイ

翠に煌く。セフィロトの第一世代と呼ばれるPBM、PBM-05
Aホーンアウルである。

それに続き、数体のPBMがビルの合間を舞う。青い単眼モノアイが特徴的なPBM、レイヴンである。レイヴンは手にしたレーザーライフルをホーンアウルに向けるとその引き金を引く。

バシユン、と重厚が唸りとともに光弾を打ち出す。ホーンアウルはブーストを吹かすと、くると横方向に回転し、機体を射線上からそらす。そのままブーストの推進力を利用し先頭のレイヴンに肉迫、ビームライフルの弾をレイヴンの胸部　ちょうどコックピットのある位置　へと放つ。光弾は胸部に大穴を穿ち、機体が爆散する。

「ちっ、これだけ数があるとやつかいだな」

ホーンアウルのコックピット内、レーダーに映る多くの所属不明の熱源反応を睨みつつ綾媛は呟いた。レーザーライフルの残弾数は20発、対して敵機の数は一十体弱というところだ。一体につき二発が限度というところか。

ホーンアウルがブースターが火を噴き、機体が舞い上がる。上空からレーザーライフルを立て続けに三発撃つ。光弾は二体のレイヴンに穴を穿つ。爆散。レイヴンたちが散開する。

「くそっ、ばらけられたか」

忌々しそうに綾媛が吐き捨てる。刹那。

「安心しろ、俺が来たらもう安心だあっ！」

レイヴンの一体が道路に叩きつけられる。そして、その上に立っているのは青いPBMだった。背部からは翼のような大型スラスターが伸び、両手には高電圧発生装置のついたナックルカバー。その単眼はホーンアウルをじっと見つめていた。まるでアイコンタクトでもするかのように。

「大滝ガイ、ゲームクック参上っ！」

無線越しに暑苦しい声が響いてくる。セフィロトの研究所で知り合い、今では背を預ける仲間となった男である。

「行くぞっ、悪のセフィロト機関！」

スラスターが火を噴き、PBMゲームクックがビルの合間を駆け

る。そしてレイヴンの一体に肉迫し、紫電を帯びた拳を叩きつける。一瞬、びくりと機体が硬直し、がくりと崩れ落ちる。高電圧により、内部メカがショートしたのだ。

「綾媛っ！二機そっちにむかった！」

「了解だ」

上昇する二機のレイヴンをレーザーライフルで打ち抜く。爆発し、破片を撒き散らす。周囲の民間人は避難しているようなので被害は出ないだろう。

「これで最後だあっ！」

下方でガイの声が響く。見ると、ゲームクツクの拳が最後の一機を貫いていた。爆散。次の瞬間。

「見つけたぜえっ！」

ゲームクツク前方に突如熱源が現れる。ゲームクツクがブースターを吹かし、後ろに飛びのく。刹那、先ほどまでゲームクツクがいた虚空を赤い光刃が薙ぐ。

「ふははっ、今日が年貢の納め時だっ！」

赤い光刃の主、突如として虚空に現れたPBM。両腕に設置されたブレード発生装置、両肩に設置されたりニアカノン。セフィロトの量産型PBMの中でも高性能な機体、ウッドペッカーである。

「くっ、懺^{さん}か……」

ガイが呟く。高麗学園から拉致されたPSI能力者の一人であり、反乱軍討伐部隊の隊長である。

「はっはあ、ここで貴様らを切り刻めば晴れて俺も九未知会の仲間入りだあ」

両腕から光刃を生み出し、ゲームクツクに肉迫する。一撃目は右から。ゲームクツクは振るわれる左腕をくぐり、懐にもぐりこむ。が、ウッドペッカーは急上昇しそれを避ける。

しかしその次の瞬間、ウッドペッカーの背部で光が迸った。そして機体が地面に叩きつけられる。

「だっ、誰だあっ！」

懺が吼える。そしてビル街の上空が歪み、漆黒のPBMが顕れる。夜闇を切り抜いたかのような黒き装甲、鋭角で構成されたスラリとした肢体。全身のランプは毒々しい赤を放っている。漆黒のPBM、怨霊^{レムレース}。その鋭い双眸がウッドペッカーを睨む。

「懺、ケテルに伝える。今ここで俺が貴様らに復讐を宣言する」
それは冷淡で、抑揚のない声だった。感情の籠らない憎悪を孕んだ言の葉。

「きつ、貴様誰だっ！」

^{リタリエイター}
「復讐鬼、それが俺の名だ」

レムレースが両腕から真紅の光刃を出し、ウッドペッカーに肉迫する。赤刃一閃。ウッドペッカーの両腕部がごとりと地面に落ちた。
「くつ、くそう」

懺は吐き捨てると、機体ごとテレポーションで消え去った。
レムレースはウッドペッカーが撤退するのを確認すると、ブースターを吹かし去ろうとする。

「待て、お前は 俺たちの敵か？」

綾媛の問いかけにレムレースが止まる。そして 。

「お前たちがセフィロトを憎む限り、敵になることはないだろう」
そう、言い残しレムレースの姿は虚空に消えた。

「リタリエイター……復讐鬼か」

綾媛の呟きは虚空に霧散した。

a c t 1：復讐宣言（後書き）

お待たせしました第一話です。

前回からだいぶ間が空きましたが楽しみに待っていた皆さん申し訳ありません。

次回はもっと早いと思います、うん。

誤字脱字訂正、要望等あればご連絡ください。
ではノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0868d/>

P-MAX

2010年10月30日10時06分発行